

医学教育の質保証—学びの責任

佐藤 二美

東邦大学医学部解剖学講座生体構造学分野教授

東邦大学に赴任して、早いもので満8年が過ぎたところである。毎年のごとくではあるが、学期末に試験を採点しながら、必ずつい漏らしてしまう言葉がある。「教えたはずなのに」。また教員同士が集まって学生の学習態度についての話題になると「今の学生は勉強しない」「本を読まない」「シケ対だけで試験を乗り切ろうとしている」などという話になる。すなわち、私たちはこれまで、学生に講義をするときに、医学教育理論を学んだわけでもないのに、なぜかしらおそらく自分の講義は完璧に近いという自信をもち、講義内容を理解できない責任は学生にあるということをご当然と考えてきた。

しかし今、この考え方を大きく変えることを突き付けられている。「何を教えるか」ではなく、「どういう医師に育てるか」、「どういうことができる医師になるよう教育するか」ということを求められるようになってきた。この教育形態はアウトカム基盤型教育 (Outcome-Based Education) と言われる。

まずこれは、米国以外の医学部卒業生に対して、米国医師国家試験 (United States Medical Licensing Examination: USMLE) の受験資格を審査する NGO 団体 Educational Commission for Foreign Medical Graduates (ECFMG) が、「2023年以降は国際的に認められた基準に認証された医学部の卒業生以外の受験を認めない」と通達してきたことから始まった。米国で医師免許を取ろうという学生は全国でも毎年100名にも満たず、特に問題にならないのではという人もいる。しかしこの通達によって突きつけられたのは、単に USMLE 受験資格というより、グローバル化に対応した医学教育がなされているかということである。この国際的な認証基準では、先ほど述べたように「最終的にどのような医師を育成するか」というアウトカムを明らかにして教育をしているかによって、その質が評価されるのである。

教える側である私たちは大きく発想の転換を迫られている。今までは知識を伝授し、学生は言われた通りそれを学

習 (暗記) し、試験では知識の有無を評価してきた。それで終わらなくなったのである。アウトカムが達成されるよう学生を指導しなければならないわけで、しかもアウトカムの指標は、学生のパフォーマンス評価であり、単なる知識評価ではない。この良い例としてイギリスの医学教育の例が挙げられるであろう。イギリスでは医師国家試験なるものが存在しない。しかし、General Medical Council (GMC) が医学部卒業時に医学生が有すべき能力をアウトカムとしてまとめており (GMCのHPから「Tomorrow's Doctors」というPDF版をダウンロードできる)、各大学はそのアウトカムが達成されるようなカリキュラムで教育し、評価して、学生を卒業させている。アウトカムは3つの観点から小項目に分けられて細かく規定されており (Outcomes1 The doctor as a scholar and a scientist, Outcomes2 The doctor as a practitioner, Outcomes3 The doctor as a professional)、この達成度評価は相当厳しいものが課されていると聞く。そしてGMCはそれらに基づいてその大学の医学教育を評価・認証し、医学教育の質を担保している。

一方、教わる側の学生ではどうであろう。単に「知っている」段階から「できる」段階へ進まなければならない。医学教育は、特に臨床実習などでは先輩の背中を見て学ぶ部分も多い。しかし、単に見ているだけの学びであるなら、知識の伝授という形態と変わらない。そこで、学生一人ひとりが、問題点を見だし、考え、解決するという自主的な学習姿勢が求められるのである。何を学ぶかは学生自身の責任に委ねられているというわけである。これは医学とは全く関係ない世界でも同じだと気付かされたことがあった。辻調理師学校の創始者である辻 静雄氏が、すぐれた料理人の学びについて「フランス料理を築いた人びと」(中公文庫 BIBLIO, 2004) という著書の中で、「教師は誰か」という一節において以下のようなことを述べている。「教師として役割を担う先輩たちには様々なタイプがある。後輩に辛く当たる人、親切な人、放りっぱなしの人、放りっぱ

なしにしておいて後輩たち本人の努力と理解を自然に待つタイプの人など、いろいろである。しかし人が人に教えられるという程度は、あるところから先は、教える側の意欲ではなく、学ぼう、身につけようという後輩たちの意欲的な探究心と忍耐、研鑽、そして才能によらなければそれ以上先に行かない。誰が本当にいい教師なのかということもあるが、フランスのコックさんたちの中に名前を上げてくる人、何万人もの中でその栄光を勝ち得る人は、みんな誰に習ったとか、誰の所に何年いたかとか言うが、しかし、その栄光は自分が勝ち得ているものなのである。結局、先

生はもしかすると自分しかいないのかもしれない。」

「いかに良く学ぶか」に対する責任は、教員側にも学生側にもある。2023年までに認証を受けるとなると、その認証を受けるカリキュラムは2017年までに策定し、アウトカムのパフォーマンス評価もそれに合わせてきちんと整備する必要がある。本学では現在カリキュラム改訂に関して熱い議論が続いている。この機会に学びの責任を教員も学生も共に分かち合い、本学の「より良き臨床医」をめざす教育がますます発展することを願っている。